

景 / 観 / 文 / 化

NPO法人 景観デザイン支援機構 けいかん・きこう <http://www.tda-j.or.jp>

2017-09-01

目次

P1
 ■巻頭
 「まちは生きているから」
 ／(写真・文) 佐山 吉孝

P2～4
 ■TDA NEWS
 <旧東海道品川宿まち歩き>
 「品川宿うなぎのねどこ」／田邊 寛子
 「品川宿の隙間」／牧田 涼
 「品川宿のまちあるき見学会に参加して」
 ／小池 耕太郎
 「時間の忘れ物」／金井 欣一

P2～3
 ■ランドスケープ事情
 「デザイン思考を自然に学ぶ方法論」
 ／金子 祐介

P5
 ■景観のディテール
 「車止めのデザイン」／栗原 裕

P6
 ■シリーズ：地域から
 「加須市」その1／内田 昇
 ■景観ビジネス最前線
 ／三協立山(株) 三協アルミ社
 ■ホワイトボード



まちづくり活動の拠点「品川宿交流館」(「宿場祭り」を前にして)

まちは生きているから

JR品川駅から南へ、超高層ビル群を抜け6、7分歩くと急に、低層建物が建て込む一帯が出現する。かつて東海道第一の宿として栄えた「品川宿」だ。まちは今も、400年来変わらず生活道路として使われている東海道を背骨に、路地空間が広がり、祭りを中心とした古き良き下町情緒が色濃く残っている。この品川宿で、私たちがまちづくり活動を始めて、来年で30年になる。

私はその活動にコーディネータとして関わっているが、この度、本紙の編集長から「街づくり、場づくりで、基本としている<論>の一端を述べよ」とのご下問があった。

私は根っこからの天邪鬼だから、人々がしたり顔で語る言葉を信用しない。よく、「まちづくりには若者、馬鹿者、よそ者が不可欠(ここに女性を加える人もあるようだが)」なんて言い方をしますが、私はそれを聞くたびに嫌悪感を覚える。この手の言葉を信用してはいけない。

確かに品川宿のまちづくりも若者が力になってきたし、時に馬鹿にになって支えてくれる人もいたし、私のようなよそ者も関わってきた(女性の参加はごく最近になってからのことだ)。ところが、若者は瞬く間に年をとるとし、馬鹿者だってすぐに知恵者ぶる。私だって30年近くもやっていれば、誰もが品川宿の人間と思いつくようになる。日々物事は動き、人々もまた変わるのだ。

他人の言葉をありがたがっていたら、自分たちのまちづくりの明日はない。相手(まちとまちの人々)は生きているのだから、自分で動いて、自分でぶつかって、自分で感じて、自分で考えて、また自分で動く。その繰り返ししかない。それがまちづくり活動だ。そしてその繰り返しの中から生まれてくる言葉、それこそが自分たちのまちづくりの魂、宝物になるのだ。やり続けよう!

旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会 コーディネータ 佐山 吉孝

TDA NEWS

TDA まち歩きイベント 2017 『旧東海道品川宿』開催報告

2017年6月10日開催
講師：佐山吉孝氏
まち歩き案内人：田邊寛子氏

1 **品川宿うなぎのねどこ**
人々の出会いを丁寧にデザインし、まちで活躍できるきっかけをつくる



田邊 寛子
まちひとこと総合計画
／うなぎのねどこオーナー

「うなぎのねどこ」は旧東海道第一宿場町の品川宿にある築100年の空町家店舗をリノベーションしたイベントのできるコワーキングスペース。2015年7月にオープンし、関わる人の夢を叶えながら、まちと人、人と人をカジュアルにコネクトする「場」として成長しています。



●景観とは

私は景観デザイナー兼まちづくりコンサルタントとして、葛飾柴又帝釈天周辺の景観ガイドラインの作成と運営・世田谷区地区まちづくり計画づくり、奄美群島沖永良部島のエラブユリの風景をきっかけとした地域活性化・漁村中山間地域の再生など、ハード整備の設計だけでなく、その景観を創り出す住民の方々と合意形成しながら住民主体の景観づくりの支援を行っています。

上記のような仕事を通して、私は、景観とは「その地域が培ってきた歴史や暮らし、営みの集積が垣間見える光景」と考えています。すなわち、地域に住まう方々の生きざまの集大成であり、生活そのものです。

●品川宿の特徴

旧東海道は、海岸が近く緩やかに蛇行している尾根道で、江戸時代からのヒューマンスケールな道幅を今も守っています。



東海道は江戸時代に多くの参勤交代を受け入れたため、裏路地が生活道路として発達しました。

社寺が多く、かつては花街もあり、ヨソモノを受け入れる広い心のある宿場町気

質、今も祭りが盛んな下町情緒あふれるまちです。

まちなみも江戸時代の間口税の名残で間口が狭く奥行きが深い町割、出桁づくりの建物が現存し、路地には現役の井戸があり道空間は魅力的なコミュニケーションの場となっています。



またJR品川駅徒歩圏の立地から、大規模な住宅開発が多く、流入人口は増加傾向にあり、新旧住民の混在で、祭りにも多くの子供たちが参加する元気なまちです。

一方、路地は建て替え不全など、大規模な開発が常に仕掛けられるきっかけとなっており、品川宿のヒューマンスケールが年々消失している状況です。

さらに、京浜急行電鉄北品川駅の連立立体交差事業などを含む面的な再開発や将来的なりニアモーターカー新駅などによる通利便性向上の期待から、大規模な再開発

ランドスケープ事情

デザイン思考を自然に学ぶ方法論



品川区北浜公園にてプレイパークを管理する方から説明を受ける



公園で水飴の作り方を教わり自分たちで作って食す子供達

私は、少し前まである地方にある専修学校の建築学科にて教鞭をとりながら、浜松市の「景観」がどのような場所でどのように形成されているのか調査し、問題点をまとめてきた。その資料で生徒たちと一緒に、自分たちの住んでいる浜松市の「景観」形成の現状について考えてきた。さらに静岡県全域の中で行われている「景観」形成とその行政が行っている「景観」形成とは何が違うのかについてもまとめた。この活動の中で、ここの行政において「景観」と呼ばれているものは、歴史的建築物や街並みの保存、サインや屋外広告物、街路樹などによる緑化計画など、今まで建築・土木の分野の中におかれてきた結果、都市計画の分野から漏れ落ちてしまったもののみだということが分かってきた。また、その漏れ落ちたものは個別に評価されてしまい、「トータルなまち並み＝「景観」形成」としてみなされていないことがわかってきた。行政のまちづくりを構想するための財政問題もあるが、「トータルなまち並み＝「景観」」形成を行う思考欠如が垣間見えた。

一方「東京は、住むまちではない。働きに行くまちだ」という固定概念を持っている学生が多いということもわかった。つまり、東京にも歴史の積み重ねの中で築いてきたコミュニティがあるのだが、一般のメディアが日常の東京について伝えきれていないことだ。

そんなことを考えている折、今回TDAが主催する「品川宿まち歩き」に参加し、「トー

が計画されており、一層品川宿のアイデンティティが失われる可能性が高い状況です。

●NPO法人旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会の存在

「旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会」は、昭和63年に品川宿の町会・商店街・商店会が協力し設立され（以下まち協）、平成7年にまち協が主体となり、東海道品川宿周辺まちづくり計画書を策定、「祭り」をキーワードに人々の活動などのソフト面から良好なまちなみ形成のハード面まで丁寧に計画し、平成23年からは品川区景観アドバイザーとして景観まちづくりを支援しています。

●情報が集まるまちの開かれた場とおせっかい

「まち協」は毎月最終火曜日21時から、誰もが、まちについて考えたこと・やりたいことなどを発表し、仲間を集める「開かれた場」の運営を約30年間継続しています。ここに様々な情報が集まり、様々な新たなプレイヤーのチャレンジの後ろ盾となり、活躍を見守っています。

特に「休眠不動産」や居を構えたい人の情報が集まるなど、結果的にマッチングが行われています。情報の共有と引き合わせのおせっかいが、まちに新たな動きをつくりだす秘訣と感じています。

「うなぎのねどこ」と私の出会いも、「まち協」がきっかけです。

●「うなぎのねどこ」の使命は3つ

様々な方の協力をうけてオープンした

「うなぎのねどこ」は使命があります。

① 空き物件の緩やかな活用のビジネスモデルとなること：小さなお金を生み出し回し、不動産オーナー・賃借人双方に利益があり、他の「休眠物件」オーナーに活用 の具体例を示す。

② 100年前と100年後の人々へまちの記憶をリレーすること：「かもじや」という花街の名残を持つ店、建物の命を全うさせることで、記憶を次世代に継承する。

③ 個人のクリエイティブな活動でまちのアイデンティティを守ること：自分の「暮らし・幸せ」をクリエイティブしたい人々の活躍の場となるインキュベーションとなり、その姿をまちに表出させる。

●「うなぎのねどこ」のアウトカム

その使命を達成すべく活動する過程で、品川宿で活躍する多様な人々と協働活動が生じ、緩やかな連携と新たなムーブメントが生まれ、愛されてなかった場所にカジュアルなコネクションを生み出す「プレイスメイキング」するだけで、まちがいろんな人の「居場所」になってきています。



旧東海道での子ども道遊び

●急がば回れの景観づくり

多様なコミュニティが交わる「点」である、コミュニケーションの「場」を丁寧に

デザインするだけで、まちが大きく変わってきます。

きっと自分のやりたいことで楽しんでる大人の姿は、「人生も暮らしもまちも自らの手で作るんだ」と、子どもたちに語りかけるのではないのでしょうか。



旧東海道を賑わい活用した地域イベント

「うなぎのねどこ」は、そんな「場」を増やしていく、暮らし・営み・賑わいの風景を創り出す、まちひとこと総合計画書の自主実験プロジェクトです。

この経験は、コンサルタントとしての景観づくり支援に実践的なプランや実現可能性とそのプロセスをこれまで以上に一層大切にすることを胸に刻ませてくれました。

ローカルルールや地域コミュニティ、実施するプレイヤーが関わることで新たなまちの可能性が出てくることを実感できる「品川宿うなぎのねどこ」にどうぞ遊びに来てください。



出会いを丁寧にデザインするまちあるき

TDA 正会員 金子 祐介



まちづくり研究所代表の佐山吉孝氏から品川宿の歴史について学ぶ



品川宿に残る伊豆長八こと入江長八の襷絵（品川区指定有形文化財）

タルなまち並み＝「景観」について再度考えるきっかけを頂いた。今まで、私は、「景観」とは、目に見えるかたちで表現された物体としてのデザインの総合様態だと思っていたが、参加された多くの品川のまちづくりに関係している人々の話を聞いていると「トータルなまち並み＝「景観」」を形成するためのデザイン思考そのものだというところらしい。つまり、まちに住んでいる人々に「どのようにしたらデザイン思考を学んでもらえるか？」そして「デザイン思考を学んだ住人がまちを自発的に良くする方法について考えてもらう」というプロセスを「景観」と呼んでいる。そのために、旧品川宿の歴史を知ってもらおうと「定期的に旧品川宿の歴史を巡るツアー」を組んだり、現況の町名区分により分断されてしまうまち並みを「連続的なまち並みに改善するための会議」を企画するなど、「人が住んでいるまち」としての品川宿をどのように築きあげていくかということを実際に考えているのだ。「景観」を作ろうとする人々から、「品川宿に住みついて生きるということを通してしか「トータルなまち並み＝「景観」」を作ることには出来ない」という意志が伝わってくる経験ができたことは、本当に有意義であった。

そして、個人的に活動している、『景観デザインマップ』作成というメディアの必要性を改めて強く感じ、新たな視点のヒントをいただけた心励まされる「まちあるき」であった。

2

品川宿の隙間

品川宿／天王洲アイル／品川埠頭



牧田 涼

法政大学大学院建築学専攻修士2年／赤松研究所所属

品川は、埋め立ての時期の違いにより、それぞれの地域間の繋がりが無い。例えば、品川宿には商店の賑わいがあるが、天王洲、埠頭にはない。

他にも、品川は昔、屋台が数多く立ち並ぶ宿場町として機能していたが、天王洲と品川埠頭側にはそのような商業の賑わいが無い。今は品川にも屋台は1軒しか残っていない。そこで僕が携わった設計課題では、北品川の商店街に着目し、それぞれの地域を繋ぐ媒介として屋台を設計した。飲食や小商いの集うイベント感覚の場で、人びとの生活の場とは切り離されていた屋台が新たな商業機能を生み出す、多様性のある移動式商店として提案した。北品川には八百屋、マッサージ店、居酒屋、コーヒーショップ、定食屋、自転車修理屋といった数多くの活気ある商店が立ち並ぶ。それらの既存の物や人といった資源を屋台に組み込んで活用する。屋台が挿入する場所は、エリアを大まかに旧街道、品川浦、埋め立ての北品川、天王洲、品川埠頭がありその中でも、品川には現在、隙間と言えるような場所が数多く存在する。北品川の空き地だけで約50箇所、品川浦では行き止まりの路地が25箇所、北品川の埋め立てエリアで見ると昔の海岸線のエリアによってできた三角のヘタ地だけでも30箇所存在している。



屋台の可能性を秘めた品川宿の街角

その隙間を生かして屋台を運営できないかと考えたのがきっかけである。実際に作りたいてい申し出てくれたカフェのオーナーさんと一緒に設計を進めている段階である。様々な機能を持った屋台がある時は、開かれた場所に集まりマルシェにもなる。生活の延長線上でありながら、使い方によって日常と非日常が変化し、屋台同士が繋がり、人が移動することで新たな活動が生まれる。ここから多様な住民、人同士の関係が品川で育まれていくことを願っている。まち歩きに参加して、さらにこのような願いを叶えたいと実感した。

3

品川宿のまちあるき見学会に参加して



小池 耕太郎

東京工業大学大学院修士1年

景観デザイン支援機構主催の「品川宿のまちあるき見学会」に今回初めて参加させて頂きました。

品川宿は現品川駅のすぐ南東に位置し、日本橋から延びる旧東海道の第一の宿場町として江戸時代に栄えていました。そのため早くから市街化が進み、都心近郊とは思えないほど歴史的建築物が現存している地域となっています。しかし、明治期からは近接する国道や鉄道に交通の要衝としての機能を奪われ、宿場としての斜陽化を辿っています。

そして、2020年に開催される東京オリンピックに向けた品川駅周辺の再開発の余波をうけ、旧東海道を挟んで存在する商店街の中にマンションが立ち並ぶようになり、品川宿の景観が崩れていく恐れがあると感じていました。

しかし、今回の街歩きを通して、品川宿にはまだまだ歴史的遺物が数多く存在する地域であることを再認識させていただきました。



旧東海道から延びる横丁の細かさや旧東海道の裏側に存在する路地の中央に“井戸”が存在していること、住宅地に突然現れる“小規模の公園”などから、品川宿には古くからの地割が残っていることがわかり、歴史の重層性が見て取れる良い経験となりました。

また、旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会コーディネーターの佐山さんのお話では街への集客や景観向上の取り組みのみならず、これから地域を支える子供たちへの啓発（しながわっこプロジェクト）を通して未来の品川宿をより発展させていく試みを垣間見ることのできる貴重な時間でした。

4

時間の忘れ物

人づくりのまちづくり



金井 欣一

セントラルコンサルタント(株)デザイン室

旧東海道北品川の街を覗かせてもらった。まず、目に飛び込んできたのは、通りに面して「畳屋」さんがある。しかも、昔と変わらず戸を開けっ放しにして、仕事をしている。土間の上に置かれた台の上の畳床と真新しい畳表、あの太いまち針をぶすぶす刺して張りを取る姿が懐かしく思えた。聞けば、この「畳屋」さん、宝暦11(1761)年の創業らしい。瓦屋根の庇を付け、軒先に屋号入りの暖簾、縦格子の窓、味のある無垢板の掘り込み看板等、意欲的に街を演出している姿に感心した。この「庇」と「暖簾」は他の店でも実施されており、味わいのある景色を生み出している。



この商店街は、地域連携型モデル商店街事業の助成により、電柱も地中化され、街の活性化をめざし、旧東海道の石畳化や街路灯の整備など宿場町の景観を再現・復興しようという取り組みによりきれいになり、様々な「旧東海道」をキーワードに、ここに住まう人達が時代を紡いで、繋がっていると感じさせられた。ここまでの「人づくり」にこそ、この商店街の素晴らしさが有るのではないと思う。また、路地裏には路の中に設けられた「井戸」が残っているのには驚かされた。まるで「トマソン」のような風情であり、邪魔者と思えたが、使われているものもある。品川宿を支えてきた庶民の生活の跡を感じさせるものが現代の生活の中に残っていた。「生活者の視点」を持って、過去と現代を結んで街づくりを実践している「旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会」の皆さんにエールを送ります。



景観のディテール

車止めのデザイン

TDA 正会員 / (有)ユー・プラネット
栗原 裕

■多賀大社の参道「絵馬通り」

滋賀県犬上郡多賀町にある「多賀大社」は、伊邪那岐大神（いざなぎのおおかみ）、伊邪那美大神（いざなみのおおかみ）の2柱を祀る古くからある由緒ある神社であり、年間約170万人の参拝者を迎えている。

近江鉄道「多賀大社前」駅から多賀大社に至る参道が「絵馬通り」である。「絵馬通り」はアスファルト舗装の道の両側にコンクリート側溝があり、中央部に消雪パイプのある、幅員5～8m程度のごく普通の歩車分離していない道路であったが、観光客を迎えるのに相応しい道路として整備することとなり、すでに第1期工事が完成している。



■整備の考え方

「絵馬通り」の整備にあたっては、できれば歩行者専用道路、少なくとも一方通行道路にしたかったが、地元の生活道路であり、代替える道路がないことから対面通行のまま整備することとなった。そこで、歩行者の安全を確保し車の速度を物理的に抑制するために、「狭さく」を設置することとした。本来であれば、安全のために狭さく部の両側に縁石を設置したかったのだが、中央にある消雪パイプの水が道路端部まで行かなくなってしまうことから、縁石や歩道の段差等が設けられなかった。そこで、狭さく部の両側に車止めを設置して歩行者の安全を図ることとした。

■車止めのデザイン

狭さく部分は車道を狭く（幅員3m）するため、歩行者空間が確保できるので車止め代わりにベンチを設置し来訪者の快適性を確保しようと考えたが、ベンチの設置は警察の許可が下りなかった。そのため、一部車止めを人が座れるタイプとし、来訪者の休憩スペースとしても利用できるようにした。また、車止めの色は神社をイメージできる丹色を基本とした。

◎車止め-A

標準型の車止め。頭部をアルミ鋳物とし、夜間の演出、視認性を考慮して電球色LEDランプを内蔵。

◎車止め-B

車止めであるが、人も座ることができるタイプ。夜間の演出、視認性を考慮して電球色LEDランプを内蔵。



◎車止め-C

多賀大社のイメージに合わせた灯籠タイプ。夜間の演出、視認性を考慮して電球色LEDランプを内蔵。



◎車止めD・E

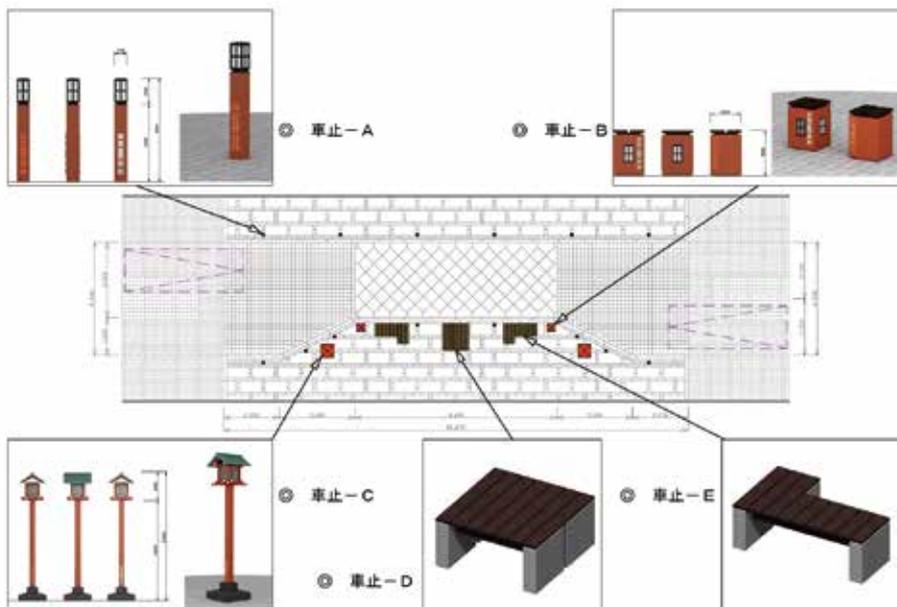
ベンチ、テーブルとしても利用できるタイプ。



昼間の全景



夜間の全景



「加須市」その1

あの商店街の風景を再び



商店街の風景



空き店舗の活用

騎西商店街は、埼玉県北東部に位置する加須市騎西地域にある商店街。平成の大合併で、騎西町から新たに加須市となった。最寄り駅の東武伊勢崎線加須駅からバスを乗り継いで10分程度の場所に位置する。都内から電車で約90分のベッドタウンであり、加須市の人口は11万人。騎西地域に限っては約2万人となっている。

約1300年前から鎮座する玉敷神社と戦国期に築城されたといわれる騎西城があった歴史のある土地であり、酒造や武州正藍染、白木綿、花火、足袋などの「ものづくり」をしている人が多く生活していた地域でもある。

しかし、近年の自動車の普及や大型店舗などの影響もあり衰退の一步を辿っている。明治35年の営業便覧には、約200店舗が記されているが、現在は39店舗の営業のみとなっている。自己調査の結果、現在、商店街の中におよそ47の空き店舗と18の空き地があり、店舗に代わり住居も多く建ちはじめている。本来の商店街の風景が消えつつあり、商店街の存続も危惧されている。

私たちは、騎西の歴史ある商店街にもう一度賑わいを取り戻すことを目的とし「歴史と文化」、「ものづくり」をテーマに「Kisai

machidukuri」という活動を、加須市と加須市商工会の後援のもと、地元商店のご協力と有志メンバーで活動を行っている。

商店街の店舗の多くは、城下町特有の間口が狭くて奥に長い土地形状となっており、道路に面して店舗がある。表を改修しており、一見新しい建物でも築100年以上という店舗も少なくはない。店舗の奥には住居があることから、今もなおそこでは家主が生活をしている。

Kisai machidukuriのメインの活動は、「ものづくり」をしている作家やクリエイターに空き店舗を借りていただき、創作の場として使用していただく事で、商店街に賑わいを取り戻すことである。現状では、電気や水道などインフラが分かれていない為、まだ貸せる状態ではないが、その問題を解決するために、加須市や商工会のご協力のもと、活動の一部に補助金を利用させていただいている。地元商店や有志メンバーからも協賛金を募っており、地域一体となって取り組んでいる。

私たち Kisai machidukuriの活動が、シャッター商店街という社会的な問題を抱えているこの街との架け橋となって、様々なプロジェクトを通して商店街の魅力を次の世代へ伝えていくきっかけとなることを願っている。

景観ビジネス最前線

アルミを選ぶ



Flat

Design

アルミでつくる



「ラグフォート」静岡赤十字病院



「灯籠・車止め」多賀大社絵馬通り

三協立山株式会社 三協アルミ社

〒933-8610 富山県高岡市早川70
エクステリア事業部 パブリックエクステリア部
TEL 0766-20-2264

<http://alumi.st-grp.co.jp/>

ホワイトボード

今号は、6月の街歩きの報告が中心。多様な意見は、やはり“まち”の力の現れだろうか。また“細部には全体が潜む”と考え、不定期になるが新シリーズ“景観のディテール”をはじめた。実務でお世話になる企業とのコラボ紙面でもあるが、景観にたいする見

識をお互いに深めるきっかけになればと考える。読者の忌憚ないご意見をお待ちしたい。さて偶然ではあるが、“地域から”の加須市に埼玉県初の高校野球覇者（花咲徳栄）が誕生した。拙紙もこれにあやかりたいと、いつになく編集会議は盛り上がった。